

「日本事情」の役割とイメージ

—学生たちの眼をとおしてみえてくるもの—

徳井厚子

- I はじめに
- II 「日本事情ゼミ」について
- III 「日本事情ゼミ」にもとめられているもの —アンケートの結果から—
 - 1 多様化する受講者
 - 2 日本事情にもとめられているもの
 - 2-1 受講動機 —日本事情に求められる役割—
 - 2-2 「ゼミでとりあげたいテーマ」 —日本事情に期待するイメージ—
- IV 実践報告
 - 1 授業形態
 - 1-1 共同研究
 - 1-2 討 論
 - 1-3 『論集』にみる「日本事情」の意義

I はじめに

「日本事情」が留学生向けの科目として設置されて久しい。しかし、その内容、意義などについては、まだまだ十分に議論されつくしていないといえる。日本事情の実態については、長谷川他（1992）が、日本事情教育の形態等について日本語教育機関へのアンケートをおこなっている^(註1)。

「日本事情科目」は、留学生向け科目として、「日本語科目」と共に開設されてきた。そして、その形態としては、「専門教官による講義」「日本語・日本事情教官単独によるもの」など、さまざまである。本学でも、社会系、自然系、人文系など多くの先生がたの協力を得ておこなっているオムニバス式の「日本事情」がある。また、「日本語・日本事情教官」単独によるものもある。しかし、日本で学ぶ留学生にとって、「日本人」と接する機会に恵まれながら「日本事情」の受講対象者を「留学生のみ」と限定してしまうのは、非常に残念なことである。日本人学生側からみても留学生と接する機会にめぐまれていながらそのチャンスがないというのも残念なことであるといえる。こうした理由から、93年度より本学（旧教養部・現共通教育センター）では、日本人も受講対象者に含めた「日本事情ゼミナール」を開講した。今年で3年目を迎えたが、毎回は試行錯誤のくりかえしであったといっても過言ではない。

本稿では、日本事情ゼミナールの「試行錯誤」の記録をふりかえりつつ、アンケートと実践報告を中心に、学生の眼をとおしてみえてくる「日本事情」とは何かについて考え、日本人も交えた「日本事情教育のひとつのありかた」をさぐってみることにする。

II 日本事情ゼミナールについて

現在、信州大学で開講している日本人、留学生混成による「日本事情ゼミナール」は、共通教育科目の中の総合科目として位置付けられている。(ただし、教育学部 国際理解専攻の学生には、選択必修となっている。) 開講しているのは半期(前期および後期)であり、それぞれ2単位ずつで、前期は「日本事情ゼミナールⅠ」後期は「日本事情ゼミナールⅡ」という名称になっている。学生は、ⅠおよびⅡの両方を受講することもできるし、いずれか一つを選ぶこともできる。なお、本ゼミナールの単位は当然のことながら、日本人にも与えられる。また、留学生にとってもこの単位は日本語・日本事情科目としてでなく、総合科目としての単位となる。

本ゼミ95年度の講義要項は以下の通りである。

1 授業のねらい

本ゼミナールは留学生および日本人学生が「日本文化とは何か」「日本人とは何か」について共同研究、ディスカッションを通し、学んでいくゼミナールである。

2 授業の概要

日本人学生および留学生の合同チームによる共同研究、口頭発表および討論を行う。

昨年は「いじめ」「日本人論」などをテーマに活発な討論がおこなわれた。学生たちの主体的な参加を望む。

なお、受講者数については日本人学生と留学生ほぼ同数を予定している。

III 「日本事情ゼミ」にもとめられているもの —アンケートの結果から—

1 多様化する受講者

日本事情ゼミナールは開講当初、小規模のゼミナールとして運営することを計画していた。93年度の受講者は15名前後(留学生、日本人学生半数ずつ)と、非常にこじんまりとしたものであった。しかし、2年目(94年度)には希望者が50名前後、3年目(95年度)には90名前後となり(ただし、95年度からは受講者を制限し、50名以下におさえている)、特に日本人学生数の伸びがめだってきている。日本人学生の中には、アメリカやメキシコなどでの留学経験をもつ者や、すでに海外の大学を卒業し、本学に入学した学生もいる。また、中国からの帰国者や、日本で生まれ育った華僑の学生もいる。このように、非常にさまざまなバックグラウンドをもった学生たちが増えている。本ゼミナールは「留学生」と「日本人」の「合同」ゼミとしているが、さまざまなバックグラウンドの学生が増えた今、「留学生」対「日本人学生」という対立の構造ではとらえることは不可能である。メンバーのひとりひとりが「異文化」とむきあうひとりの人間である、とらえることが求められていよう。

2 「日本事情」にもとめられているもの

では、日本事情ゼミナールを希望する学生は「何」を求めているのだろうか。本ゼミでは、受講希望者が多い場合、開講時に学生にアンケートをとり、受講者数を制限している。95年度より、アンケートによる受講者制限をおこなっているが、その際、「なぜこのゼミを希望するのか」「ゼミでとりあげたいテーマについて」について、書かせている。以下ではこのアンケート結果をもとに、学生たちが「日本事情」にもとめているものは何か、について考

えたい。なお、2-1および2-2で報告するアンケートは95年度後期の受講希望者に対しておこなったものである。アンケートをおこなった人数は総数90名である。(うち日本人学生は66名、留学生22名、帰国子女1名、在日華僑学生1名である。)留学生の出身国は次のとおりである。

[香港, 中国, 台湾, マレーシア, 韓国]

2-1 「なぜ日本事情ゼミナールを希望するのか」—日本事情に求められる役割—

2-1-1 留学生の受講動機

a 日本人学生との交流

受講希望の理由として、最も多くあげられているのは、「日本人学生との交流」である。これは、せっかく日本に留学するチャンスをつかみながらも、ふだんの生活の中で、「日本人」と深く知り合ったり、話し合ったりする機会が少ないことも原因であると考えられる。

- 1 この授業を通じて、よい友達ができたらいいなと思います。
- 2 私は外国人として、日本人と仲良くさらに国際交流を深めたいと思います。
- 3 さまざまな問題について、日本人学生と話し合ったり、交流したりするのは本当にいいと思うので。
- 4 留学生以外、日本人との交流会をやりたい。
- 5 もっとたくさんの日本人の学生と知り合いたい。

b 日本人の若者の考えを理解するため

この授業は、留学生にとって、「同世代」の日本人と話しあう場でもある。「ふだんの生活の中で日本人の年上の知り合いはいるが、同世代の知り合いが少ない」という留学生の声を良く耳にする。大学という場でも、授業で隣にすわったりするだけであれば、意見を交換するまでの仲に至らないのは当然であろう。本ゼミはそんな学生たちに「同世代の人間」として、知り合い、意見を交換しあう「場」のきっかけとしての役割がもとめられている、と考えられる。

- 6 日本人の若者の考えが深く理解できるので。
- 7 日本人の若者といろいろ話したいので。

c 日本語の会話力向上のため

留学生にとって、日本語による日本人学生との討論は、日本語の聴解、表現力を高める訓練にもなる。

- 8 皆の前で話す力をのばすため。
- 9 日本語の表現力を高めたいので。

d 日本について学ぶため

留学生の興味は、特に「最近話題になっているできごと」である。こういったことを、日本人学生も交えて討論していく「場」としての役割がもとめられている、といえる。

- 10 この授業で、日本で話題になった最近のできごとを討論して、いろんな日本人の考え方をきいて、討論したいと思います。
- 11 いろいろなこと、本から教えてもらえないことがこの授業で日本人の同じ世代の人からきかせてもらって、いい勉強だと思います。正しいかどうかは別として、お互いの交流を大切にしたい。

12 前期もこの授業を受けて、日本人といろいろなテーマについて、討論した。この授業を受けて、私はたくさんのがわからない、つまり常識が低いと感じた。だから、この授業からもっといろいろな人と出会い、学びたい。

e 日本と他の国との比較

「日本事情ゼミ」では、日本のことだけでなく、留学生の出身国と比較するかたちで討論をすすめることもある。留学生にとっては、授業を通じて「日本」だけでなく、他の国の事情を知ること大きな関心となっている。

13 日本文化と他の国の文化を深めて理解することができる。

14 討論をとおして、日本のことのみならず、他の国のことももっと知りたいと考えています。

2-1-2 帰国子女、在日華僑学生の受講動機

日本事情ゼミには、留学生、日本人学生とは立場を異にする学生も受講している。15は高校まで中国で育った帰国学生のものだが、「日本についての知識の獲得」「日本語の上達」「交流」など、留学生の回答と重なる部分が多い。16は日本で生れ育ったいわゆる華僑の学生であるが、ゼミ受講の目的を「留学生（特に中国人学生）との交流」としている。中国人でありながら、「日本」という異文化の中で育った本人にとって、母国からの留学生と親しくなりたいという気持ちが生じることは当然であろう。彼にとって、「日本事情ゼミ」はそのきっかけをつくる場でもあるのである。

a 日本（語）についての知識を得るため

15 わたしは高校までずっと中国にいましたので、日本のことについては知識が乏しいです。大学生なのにこれもわからないですか、と思われたくないから、知識を増やすために、日本をもっと知るためにこの授業をとる必要があると思います。日本語も上達するし、友達もできると思います。

b 留学生との交流

16 わたしは日本で生まれた中国人で、いわゆる華僑です。中国人学校へ9年間通いました。もっと中国人はじめ、他の国の留学生と交流をもちたいと思っていました。他の国の習慣、風俗、観念などさまざまなことに、この授業をとおして、積極的にふれたいと思います。

2-1-3 日本人学生の受講動機

日本人学生の受講動機は、以下にあげるとおりである。

a 留学生との交流

これは、当然予想されるように圧倒的に多かった。また、最近よく耳にする「国際化」という言葉からの影響も大きいと考えられる。

17 この授業以外に外国人学生との接触の機会がないので、ゼミをとおして外国人留学生との交流を深め、視野を広げたいと思いました。

18 最近、世界的に国境を越えたつながりが求められるようになってきた。日本も例外ではないが、せっきく身近な大学にいる留学生の人たちでさえあまり接触する機会がない。この授業をとおしてせめて半年でも留学生と接することであらためて日本人である自分をも見つめ直したいと思った。

19 普通の生活の中で留学生とふれあう機会がない。

b 自分自身の異文化体験から

これは自分自身が実際に外国で生活し、「異文化における日本人としての自分」を考えたというケース(1)や、身近にいる外国人との接触から興味がでてきたというケース(2)、また、それらの体験をとおして外国人とのコミュニケーション上のトラブルなどの経験をきっかけに興味が出てきたケース(3)などがみられた。

(1) 外国での「異文化体験」がきっかけとなった場合

外国での「異文化体験」は、「日本人としての自分とは何か」ということを考えさせる経験でもある。こういった海外での経験が、日本事情ゼミを受講する動機となっているケースである。

20 アメリカに1か月ほどいたことがあるが、「自分が外国にいて聞く日本について」と「外国の方が日本にきて話す日本について」の違いに非常に興味がある。

21 アメリカの大学を卒業するまでの4年半、アメリカにいる日本人として考えた。今、日本にいる留学生たちがみている日本と日本人の意見をきき、ともにディスカッションする機会が得られればと思った。

22 私は、すでに10か国ほどにいて、その時の「外国人としての自分」をもう一度考え直すきっかけにしたい。

(2) 身近な外国人との出会いがきっかけとなった場合

アルバイト先や大学内などの身近な場所での外国人との出会いは「彼等をもっと知りたい」という気持ちへの動機へと変化していくようである。そして、その気持ちの変化が、本ゼミの受講動機となっているケースである。

23 バイト先で知り合ったアルジェリアの男性が「妻のいっている信大に来年入るためにこれから半年勉強とバイトを両立させるつもりだ」と私に話してくれた。そして、「どうして留学先に日本を選んだのかと尋ねると、「日本をしりたいから」と答えた。その時「外国人からみた日本ってどんなだろう。勤勉というイメージがあるらしいけれど、本当にそれだけなのかな。」と思った。

24 同じクラスに留学生がいて、前に徹夜でキリスト教についての事はなしあった。いままで一度もこのように真剣に話したことがなくて、とても新鮮な感じがして、吸収するものがすごくあったような気がした。

(3) 外国人とのコミュニケーション上のトラブルの体験が動機となった場合

(1)、(2)にあげたケースの中で、とくに外国人とのコミュニケーション上のトラブルが受講の原因になったケースである。25の学生はアメリカ人とのコミュニケーション上の衝突を体験し、また、26の学生はうまく外国人とコミュニケーションできなかったということを体験している。いずれもコミュニケーションの難しさを体験しているわけだが、このような苦い体験をとおして、「コミュニケーション」の重要性を再認識したケースといえよう。

25 高校時代に日本人、アメリカ人10人ずつで1か月間ずつのホームステイをしました。その2か月間に日本とアメリカ人の中で何度か衝突し、その時は自分たちが正しいと思い互いの主張をゆずらず、相手のことを腹立たしく思ったこともありましたが、現在はそれぞれの主張の違いは生活環境からきたものではないかと思っています。この経験から、このゼミが興味深く感じられました。この講座にあつまった人たちの国籍はさまざまですから、

多くの相違点を知ることができるのではないかと期待しています。

26 今の私は外国の人に道をきかされただけであたふたしてしまいます。この前、外国の人にプレゼントされたのに、ろくにお礼もいえませんでした。情けなかったです。

c 「異文化理解」教育としての役割

回答には、次のように単なる「交流」だけではなく、交流をとおして「多様性」に対して「寛大」になりたい、という「異文化理解教育」としての役割を求めている回答もみられた。

27 異なる価値観をもつ者同志の会話をとおし、多様性に対して寛大になりたい。

d 「コミュニケーション教育」としての役割

教官の講義を聴く、というスタイルの授業は特に大学教育の中で多い。本ゼミは「共同研究」「討論」という学習者中心のスタイルである。口頭発表が多いという「授業スタイル」が受講の動機となっているケースがみられた。また、「討論」の形態を模索していく「場」として、本ゼミの受講を希望しているケースもみられた。

28 受け身の授業ばかりのわたしには、こういう授業が必要なんです。話すことはとても大事だと思う。それが、このゼミで得られそうな気がしたからです。

29 今までの授業の中で討論することがなく、「他の人がどのような意見をもっているのか」というのを知る機会にめぐまれません。偏りがなく、視野が狭くならないためにもこの授業をとおしてお互いの意見交換をしたいと思います。先生になった場合、人前ではなすことが多くなりますが、人前で話すことが得意といえないので、このさい、授業をすすめていく上ではっきりと自分のいいたいことをわかりやすく伝えるようになる勉強もかねて、希望しました。

30 (前期に受講してみて) 人の話というものを深く考察できるチャンスを数多く持つことができた。さらに、プレゼンテーションの形態を模索するのにも大変役立った。

31 あらたな技法で討論をさせるべく、このゼミを選んだ。

e 「自己の変容」の契機となることを期待している場合

受講希望者の中には、次のように、留学生とのゼミをとおして「もっと積極的な自分」に変えていきたい、という者もみられた。

32 (前期に受講してみて) はっきりいってあのような自分では自分が納得できないのです。P君やZさんに圧倒された内気な自分に納得できていないのです。だからもう一度この授業をとり、自分の意見をぶつけたい。そして、留学生たちと もっと仲良くなりたい。

33 私を含めて信州大学にいる一般日本人学生というのは、生まれた時からこれといった苦勞も不自由もなく、生活も中くらい、何に対しても与えられたものをただ漫然と受け身的にこなしてきて、大した目標もなく、右へならえで大学にきた、という人がほとんどだと思う。それに対して、留学生のみんなは地元大学のあきたらずに遠い日本のこんな山奥まで勉強しにきているというチャレンジ精神とかすごいバイタリティーを感じる。そんな彼等と接し、話し合い、理解しあえたら、わたしにとっても大きな刺激になって漫然な人生から一歩ふみだせそうな気がする。

f チューター会の活動に生かすため

本ゼミを、チューター会の活動にいかしてゆきたいという受講希望者もいる。

34 現在、チューター活動をしているが、もっと留学生としりあいたいし、理解しあいたい。

このゼミでやったことをチューター会活動におおいに活かしてゆきたいと思っている。

g プレゼミとしての役割

受講希望者の中には、次のようにプレゼミとしての役割を期待している学生もみられた。

35 このゼミで学んだことが来年度からのゼミをうけるのに役にたつと思う。

h 専門、仕事など将来に生かすため

本ゼミは、共通教育の中で開講しているため、1年次生が多い。したがって、希望者の中には専門にかかしてゆきたい、という学生や将来の仕事に生かしたい、という学生もみられた。専門に生かしたい、という希望者の中には37のように、自分の専門（環境学）を「国際的」な視野から研究していきたい、としている例もみられた。

36 このゼミは「文化コミュニケーション学科」に所属する上で大きな意義があると思う。

37 僕は今、新しくできた物質環境科というところで環境問題にとりこんでいきたいと思っているのですが、ほとんどの本で紹介されているアマゾンやマレーシアの森林伐採などの裏にひそんでいる現状、つまり日本とか他の先進諸国の都合で勝手に破壊したものを責任転嫁(?)しているという事情がある。このことについても他の国からどんな抗議をうけているのかということも分からずじまいになっているのが、今のマスコミである。このゼミをとればいろんな意見がでてくると思うし、個人的に将来に役立てればと思い、このゼミをとりたいと思いました。

38 わたしは将来、日本以外の場所で（おそらくアジアで）仕事をしようとしています。その時、大事なことは日本文化を深く知っていることだと思い、希望します。

39 わたしは将来、高校の英語の教員になりたいと思っています。今はどの学部や職種の人も国際人にならなければならないと思いますが、教員として生徒たちに外国語を教える立場にたった時、受験のためだけに知識を教えるようにはなりたくありません。

以上から日本人学生にとって「受講の動機」は実にさまざまであることがわかる。

2-1-4 アンケートをとおしてみえてくる日本事情教育の役割

以上、受講希望者のアンケート結果を報告した。「日本事情ゼミにもとめられているもの」をとおして、「日本事情教育」の果たす役割を考えてみたい。

<交流としての場>

まず、全員に共通にみられた回答として、「交流的側面」があげられる。そして、単なる「交流会」としてでなく、お互いを深く知り、話し合うきっかけにしたい、という動機にもとづく場合が多くみられた。とくに、留学生の場合、「同世代」の日本人と知り合いたい、という希望が多い。

留学生、帰国生がもともと持っている役割としては、以下の回答がみられた。

<日本語学習としての場>

<日本理解としての場>

<比較文化としての場>

留学生にとって、「日本での留学」は、日本語を学ぶ場であり、日本を理解する場であるばかりでなく、他の国からきた留学生と知り合う場でもある。また、比較をつうじて「日本」のことばかりでなく、他の国の事情も理解していくことも日本事情ゼミの役割のひとつとして求められているといえよう。また、帰国生の回答も留学生の回答とはほぼ重なっている。

在日華僑学生のもとめている役割としては、＜留学生との交流＞があげられている。

日本人学生がもとめている役割は、以下のとおりであった。

＜「異文化における日本人としての自分」の再認識の場＞

＜異文化理解教育の場＞

＜コミュニケーション教育の場＞

＜自己変容のきっかけの場＞

＜チューター会に生かす場＞

＜プレゼミとしての場＞

＜専門に生かすための場＞

＜将来の仕事に生かすための場＞

日本人学生の回答にみられる「日本事情ゼミ」の役割は、多岐にわたっている。

まず、「異文化理解教育」としての役割があげられる。受講の動機に、「海外での滞在体験」や、「外国人との出会い」をあげている学生は多いが、このような体験をきっかけに「異文化における日本人としての自分」を再認識したい、と考えるようになったようだ。また、授業も自分自身の異文化体験自体を客観的にふりかえる契機となる。留学生と一緒に共同研究し、討論する場をもつということは、クラスそのものが「異文化接触」の場である、といえる。

次に、「コミュニケーション教育の場」としての役割があげられる。「討論」中心でおこなう、という授業形態は、日本人学生にとって「話す」ということの訓練の場にもなる。「聞く」「読む」「書く」訓練は、高校までの教育でよくなされているが、「話す」という訓練はそれほどなされていないように思われる。学生自身、こういった教育方法に対し物足りなさを感じているのではないだろうか。

さらに、学生を主体とした、「討論」中心の授業を通じてもっと積極的な「自分」へと「変えていく」、いわゆる「自己変容としての場」としての役割があげられる。

また、「チューター会の活動に生かすための場」としての「プレゼミとしての役割の場」としてとらえているケースもわずかだがみられた。

他に「専門に生かすための場」としての役割もあげられている。「コミュニケーション」を専攻するための基礎教育としての役割や、「国際的」な観点から専門を深めていく役割を果たしているといえる。

「将来の仕事にいかすための場」としての役割もあげられる。具体的には、「英語の先生」になった時や、「海外で勤務した」時にゼミでの経験を生かしていきたい、と考えるケースである。

以上、学生の受講動機から、日本事情ゼミにもとめられている「役割」について考察した。今回のアンケートは人数も限られているが、おおよそのことがいえるのではないかと思う。

アンケートの結果から、日本事情にもとめられている「役割」は必ずしも同じではなく、非常に多岐にわたっている、ということがわかる。また、受講希望者の立場、境遇もさまざまである。日本の国際化にともない、日本や外国とさまざまなかたちで関わりをもった（あるいはもつであろう）学生がこれからも増えていくのが予想される。このような様々な立場の学生を受け入れていく「土壌」のひとつとしての役割もあるのではないかと思われる。

2-2では「日本事情ゼミでとりあげたいテーマ」のアンケート結果をもとに、学生の描く「日本事情」のイメージについてのべていきたい。

2-2 日本事情ゼミでとりあげたいテーマについて—日本事情に期待されるイメージ—

日本事情について、学生たちはどのようなイメージを期待しているのだろうか。ここでは「ゼミでとりあげたいテーマ」についての回答をもとに、学生の眼をとおしてみた「日本事情」のイメージについて考え、さらにどのような役割があるのかさぐってゆきたい。学生の回答は、「日常的なもの」「比較文化的なもの」「日本社会の問題と国際化に関するもの」にわけることができる。(なお、アンケートは95年度後期受講希望者のものである)

<日常的なテーマ>

男女共学、別学どちらがいいか／都会と田舎、どちらが住みやすいか／受験勉強は必要か／死刑制度は廃止すべきか／大卒は無駄か／公共の場でさわいでいる子供をしかるのは誰の役目か／結婚は損か得か／大学で出欠をとるべきか否か／日本は住みやすい国か／会社では年功序列をとりいれるべきか／酒を飲むことはよいか悪いか／フランス核実験賛否について／いじめる側、いじめられる側の主張は／男女差別、男女平等

<比較文化的テーマ>

食文化について／日本の習慣、考え方／ゼスチャーなどからくる誤解—違いを理解するためにはどうしたらよいか—／留学生からみた日本人のイメージ v s 日本人からみた留学生のイメージ／なぜ日本人は名刺が好きか／プライバシーの問題—どこまで他人に干渉してよいか—

<日本社会の問題と国際化に関するテーマ>

在日韓国人について／戦争責任について／海外進出企業についてどう思うか／日本人観光客についてどう思うか／反日感情について—なぜ日本がきらいか—／日本の政治家のホンネとタテマエ／戦後処理にしても水俣病にしてもなぜ国の対応はこんなにおそいのか／援助について／日本は国際的か？

アンケート結果をみると学生にとって興味のあるテーマは、プライバシー、教育、酒を飲む事、結婚などの「身近なことがら」や、食文化、習慣、ゼスチャーなどの「比較」や、在日韓国人、戦争責任、援助問題など、「日本」と「外国」との間で問題になっていることがあげられる。この結果から、「日本事情教育」のはたす役割がいくつかみえてくる。

まず、「自分の身の回りでおこっている『身近』なできごとをもう一度みつめなおす」という役割があげられる。自分の「身のまわり」にある「空気のようなもの」に、もう一度光をあてて、見つめ直してみる、ということである。すなわち、今まで「無意識」に感じていた身の回りの事柄を「意識的」とらえ直してみるということである。これは、特に日本で生れ、育った者にとっては「日本」を再認識する、という意味で重要であろう。

次に、「比較」という観点から、「日本文化」をとらえなおすという役割があげられる。「日本事情ゼミ」は、「多国籍」の学生により成り立っているクラスである。したがって、「日本」のことばかりでなく、様々な国についても学んでいくことは、「異なる」価値観に対する「寛容さ」を身に付けるということでもある。そして、「多国籍」の学生によるこのゼミは、「日本」対「外国」という対立の構造でなく、「異文化」とむきあう「ひとりの人間」によって成り立っている、ととらえることが重要であるといえる。

また、「日本」を外からとらえる、という役割もあげられる。「国際化」ということがしばしばいわれているが、はたして日本は本当の意味で「国際化」しているのか、日本の「外」から「日本」を見る、という立場にたつて、「日本」という社会を改めてとらえなおしてみようということも大切であろう。

以上、本節では、アンケートをもとに「学生の眼」をとおしてみえてくる「日本事情のイメージ」について考察した。これまで「日本事情教育」のもつ「多様性」については細川（1995）が、また「複合的機能性」については砂川（1995）が論じているが、今回のアンケート結果からも、「日本事情教育にもとめられているもの」が多岐にわたっていることがわかる。

IV 実践報告

では、日本事情ゼミは具体的にどのように運営されているだろうか。本節では、これまでの「日本事情ゼミ」の試行錯誤の記録をもとに、「学生」の眼からみた日本事情のひとつのありかたについて考えてゆきたい。なお、字数制限などの都合により、本稿ではその一部の紹介にとどめる。

1 授業形態について

授業形態については、講義要項にも記述してあるとおり、「学生による共同研究、討論」を基本とした形態をとっている。具体的には、次のような方法で授業をすすめている。

- 1 合同チーム（留学生と日本人学生）の結成（一チーム4～5人）
- 2 共同研究（担当チーム）
- 3 発表および全体討論（担当チームが司会）

（なお、共同研究をとりいれるという形態は群馬大学の砂川裕一氏の実践を参考にした。）

1 合同チームの編成については、必ず日本人学生と留学生が入ることを考慮している。また、2 共同研究は、教室外活動としておこなっている。3 は共同研究の成果をもとに授業の中で全員で討論をおこなうというものである。

以下では、「共同研究」および「討論」に焦点をあて、報告をおこないたい。

1-1 共同研究

共同研究は、留学生および日本人学生の混合チームで行う。ゼミの人数が50人程度となった95年度以降は、とくに「混合チーム」の果たす役割が多くなったと感ぜられる。小人数のグループでテーマを決め、共同で作業をしていく段階は、お互いを深く知ることによって重要であろう。グループは、5人程度であるが、これは比較的共同作業をしやすく、意見交換をしやすい人数ではないかと考えたからである。

もちろん、テーマを決めたり、研究をすすめる過程でグループ内で意見が衝突したり、一致しなかった場合もみられる。しかし、そのような「衝突」を経験することもお互いを「理解」しあうための第一歩として重要な経験ではないかと思う。

日本人と留学生の間で、「お互いに深くしりあう友人」ができるきっかけは、この共同研究を共にした間柄である場合が多くみられる。

「共同研究」は、テーマを決め、そのテーマにそってグループ内で調査、討論をおこなう。共同研究の中では、以下のようにインタビュー、アンケート調査など、事前に調査をおこ

なったケースも多くみられた。

事例1 <インタビュー>

テーマ『プライバシーの問題—どこまで他人に干渉してよいか』

担当グループによる事前インタビュー

* 国勢調査の記入に関することについて（市役所につとめる国勢調査の担当者にインタビュー）

* マスコミとプライバシーについて（アルバイト先（テレビ局）でのインタビュー）

事例1は「プライバシー」についてであるが、アルバイト先での知り合いなど、「身近」に接触している「日本人」にインタビューしたケースである。共同研究は教室外活動であるため、インタビューは学外の「日本人」と接するのによいチャンスであるといえよう。

事例2 <アンケート調査>

テーマA『プライバシーの問題』

Q1 あなたがプライバシー侵害だと思うことをあげてください。

Q2 あなたが見聞きしたプライバシーの侵害の例は？

テーマB『大学の出欠は是か非か』

Q 大学で出欠をとることに賛成ですか？理由をあげてください。

テーマC『教科書問題について』

Q 「留学生への質問」

(1) 第二次世界大戦中に日本軍がおこなったことについて、あなたが習った教科書にはどれくらいくわしく書いてありますか？

1 とてもくわしく書いてある。2 まあまあくわしく書いてある。3 あまりくわしく書いていない。

(2) どんなことが書いてありましたか。かんたんにかいて下さい。

（覚えているだけでいいです。）

Q 「日本人学生への質問」

(1) 第二次世界大戦中に日本軍がおこなったことについて、教科書でどのくらい勉強しましたか？

1 かなり勉強した。2 まあまあ勉強した。3 あまり勉強しなかった。

Q2 どんなことを勉強しましたか？かんたんに書いて下さい。

小人数のグループのみの研究では、意見が偏ってしまう場合もある。アンケートによる調査は、多くのデータを集めるという意味で、実証的な方法であり、また客観的に問題にとりくむ、という点で重要であろう。

実際のアンケートからは、予想した結果とは異なった結果がでたケースや、アンケートのしかたについての反省点などもあった。例えば、Aでは、日本人と留学生とで異なった結果がでることを予想しておこなったが、実際はほぼ同じ回答であった。また、Bでは学生だけにアンケートをおこなったが、教官にも行った方がよかったのではないかと、という反省点がだされた。Cでは、質問のしかたについて、「とてもくわしい」「まあまあ」「あまりくわしくない」という書き方が主観的でないか、という指摘がなされた。しかし、一方で、アンケートの回答者が留学生であることを配慮し、わかりやすい表現を使ったり、ふりがなを付け

ている例もみられた。

アンケートという作業を行っての今回の反省点は、今後の大学生活の中で生かされてゆけばよいのではないかと思う。

1-2 討 論

グループによる共同研究の後、クラスで発表し、発表チームの司会のもとに全体のディスカッションをおこなう。ひとくちに「討論」といっても、人数などにより雰囲気はかなり異なるため、形態を工夫していく必要がある。以下ではこれまで試みられたいくつかの「討論形態」を紹介する。

事例1 <自由討論>

これは、発表チームの司会のもとに、共同研究の報告、全体討論をおこなう、というやりかたである。討論の場合は、全員が顔をみることができるよう、輪になって向かい合わせの席にしている。いわゆる「ディスカッション」とよばれている形態である。

この形態は「思ったこと」を自由に述べ、討論するという点では有効である。例えば、各国の文化の比較など論じ合うのには適している。

しかし、15人程度の場合はかなり自由に討論できるが、50人になると、「討論」という形式がかなりむずかしくなる。つまり、発言者が積極的な人にかぎられてしまう。特に、日本人学生の場合、人数が多くなるにつれて発言する人とならない人の差が大きくなる傾向があった。したがって、50人というゼミで、いかに活発な討論にしていくか、という工夫が必要となり、いくつかの方法が試みられた。

ディスカッションのテーマとしては、これまで以下のようなものが選ばれた。日本人からみた留学生のイメージ、留学生からみた日本人のイメージ/プライバシーについて/いじめについて/男女のありかたについて/日本人の宗教意識/クリスマスとバレンタイン・デー/過労死/語学教育のありかたについて/日本の国連安保常任理事国入りについて/日本の管理教育について/夫婦別姓について/戦争責任について/教科書問題について/自衛隊について/エイズについて/死について/受験戦争について/差別について/危険をとまなう祭りと伝統文化について

事例2 <グループ討論>

事例1の討論形態のディスカッションの中で、いくつかの班で試みられたのが、全体討論の中に「小グループ討論」を設けるやりかたである。問題を論じるとき、50人で論じるよりも4~5人程度の人数で話し合った方がより活発な話し合いができれば多い。例えば、「いじめ」について話し合った時には、「いじめられている人をみたらどうするか」というテーマで各グループごとに話し合い、その結果を報告する、という方法を試みた。(グループによる話し合いの時間は15分程度である)各グループからでてきた意見は、「見捨てないで相談相手にのってあげること」「対抗できる集団をつくること」「カウンセリングの時間を設けるなどして、学校あげてたたかう」「ホームルームの時間をたくさんもつこと」「先生と親、いじめられる人といじめる人が相手のせいにははいけない。皆が偽善者にならないことだ。」など、多様であった。討論をつうじて、多様な考えに触れていくことは大切であろう。全体討論の中にグループ討論を入れることの意義は、討論を活性化させていくことにある。

事例3 <劇>

「劇」を導入したユニークな試みもみられた。これは、「会社の面接」を実際に各グループで「面接する人」「される人」にわかれて演技してもらおうというものであった。

劇の導入は、実際にその場の人に扮することによって、その人の心情を考えていくという意味で興味深い方法である。「劇」を導入することによって全員が「参加している」という気持ちになることができるが、これは討論を盛り上げていく上で大切な要素であるように思う。

事例4 <ディベート>

多くの学生から「ディベートをぜひやってみたい」という要望があり、何回かおこなった。具体的には次のような方法でおこなっている。(何度かおこなっているうちに修正をしていったものである。)

参加チーム	肯定派 2 チーム	否定派 2 チーム	20名
聴 衆			30名
	肯定派 A, B	→	否定派 C, D
	第一立論 A 7分	→	第二立論 C 7分
	立論および 7分	✓	立論および 7分
	反駁 B	→	反駁 D
		✓	
	質問タイム (全員)		10分
	↓		
	作戦タイム (参加チーム)		4分
	↓		
	反駁) (参加チーム)		12分
	↓		
	作戦タイム (参加チーム)		4分
	↓		
	結論 (参加チーム)		12分
	↓		
	ふりかえり討論 (全員)		10分
	↓		
	評価 (全員)		

一般におこなわれるディベートと異なる点は、聴衆側の学生ができるだけ参加できるように工夫したこと、ディベート終了後に「ふりかえり討論」を設け、参加者も自分の「立場」を離れて自由にディスカッションをおこなえる時間を設けたことである。(その意味で、厳密にはこの方法はディベートとディスカッションを混合した形といえるだろう。)

限られた時間内で発言することは、特に留学生の場合、日本人学生と比べ、言葉の点でハンディがある。このことに配慮して参加者全員が発言できるよう気配りをしていくことが大切であろう。また、ディベートのルールについては、全員が事前に理解しておくことが必要である。ディベートのテーマとして選ばれたものは次のとおりである。

とび級は肯か非か／テレビの暴力シーンは肯か非か？／お酒を飲む事について／結婚は得

か損か／都会と田舎、どちらが住みやすいか／大学で出欠をとることの是非について／日本は国際化しているかしていないか？／外国人労働者は受け入れるべきか、そうでないか

事例5 <読書会>

ゼミの人数が15名程度の時にはこれまでかかれた「日本人論」を読み、批判的な観点から討論をおこなうという形式もこころみた。

例えば、「タテ社会と人間関係」「リーダーの条件」「菊と刀」「甘えの構造」などを批判的な観点から読み、討論をおこなった。この方法は小人数の場合には有効な方法であろう。

以上、事例1～5の紹介をおこなった。授業では、実際にはディベート型の討論とディスカッション型の討論をくみあわせる、という形で運営している。（つまりディベートのみ、あるいはディスカッションのみを繰り返し行う、ということは避けている。）また、発表のテーマが関連性をもつようなプログラムにしている。

「討論」はお互いの意見を発表する場である。しかし、本ゼミでは当然予想されるように学生の日本語力の差がある。また、コミュニケーションのスタイルの違いから、コミュニケーション・ブレイクダウンがおこっているケースも多くみられた⁽²⁾。しかし、「討論」の中でブレイクダウンを経験することは、お互いの理解への第一歩である。コミュニケーション上の失敗をとおして、「では、どのようにすれば自分の考えをよりよく相手に伝えていくことができるのか」ということを考えていくことはお互いを理解する上で大切なことといえる。

1-3 『論集』にみる「日本事情」の意義

1-2では、討論方法についてのべた。しかし、討論の時間は90分と限られており、また、50人の意見を反映させることは難しい。こういった事情から、限られた時間内での討論時間を延長し、ひとりひとりの意見をさらに反映していく、という意味で『論集』の発行をおこなっている。『論集』には「討論」をおこなったの感想、ゼミに関する感想などをのせている。以下では、ゼミの感想をいくつか紹介する。学生の眼をとおし、「日本事情教育」の意義が少しずつみえてくるのではないかと思う⁽³⁾。また、論集の最後には私自身のコメント（編集後記）もいれている。

*（このゼミの成果として）第一にふだんあまり話すことのない留学生とのコミュニケーションがあげられるが、またその交流をとおしての自己の新発見がある気がする。異なった環境で育った者同志の会話の中では本人が通常意識するような習慣がそのまま通じない場合というものでくる。そんな時、相手への接し方を変えてみる。そうすると今まで見えなかったものが見えてくるようになる。自分が住んでいた狭い世界にちいさな窓をつけたように。

*このゼミに参加して思ったことは、当然の事であるが、たとえ国がかわったとしても、人々の性格や特徴はその国にはなんら関係がなく、その人独自のものなのだ。日本人でもオープンな人はすぐにはなしかけてくるし、日本以外の国（このゼミだとアジア諸国の人になるが）の人でも、はずかしがりやだったり、なかなか他人に心を開きにくい人も大勢いる。わたしは、この当然のように思われることに一種の偏見をもっていた。無意識のうちにとおつ国の人は同じ考えで、同じ行動をし、特に日本人以外の人には活動的で、だれにでも気兼ねなくはなしかける、しらすらすらうちにそういった印象をうけていた。これは少なからず、マスコミや間違った学校教育が影響している。しかし、これらの考えはゼミによって打ち消された。グループをつくり、彼等とディベートのための下調べをしたり、話し合ったり

するうちに、私は国籍を忘れた。この初めての感覚で、もっと他の国の人と触れ合いたいと思った。

*わたしたちがおとなになり、社会に出た時、異文化間交流は大きく大切なテーマとなるであろう。その時には相手の文化も知ることが必要となろうが、まず、自分の文化を知ることが先決であろう。そして、何よりも自分のやりかたをとおした上で相手のやりかたを認め、お互いにそれについて話し合うことが重要なのではないだろうか。

*わたしは、日本人とか留学生とか分けて考えるのではなく、違う文化をもったひとりの人間として、多くの人と知り合いたいと思う。同じ国の中でも家庭という違う文化があり、違う文化が集まってひとつの国としてあり、国があつまって地球があると思う。

*いつも思うことなのですが、日本人学生の発言の回数と、留学生のそれをくらべると留学生の方が圧倒的に多いのです。日本人が指名され、ちゃんと自分の考えをもって発言しているのをみると、自分なりの考えをもっていても自分からは発言しようとしていないのがわかります。それはわたしも同じです。（略）まわりからどう思われているのだろうか、誰かが言ってくれるだろう、まあ自分の意見くらいどうでもいいか、こんな考え方をもっている自分がこれからこの授業によって変わるかもしれません。自分を客観的に見れるいい機会だと思って、これからも地道に頑張りたいと思います。

*留学生の皆さんはわたしの抱いていたイメージどおり積極的でとまどってしまいましたが、ディスカッションの中で「悪いイメージをもってはいないの？」と声がでた時には私が外国人の人にはどう映っているのかと心配するように留学生もまた不安なのだと感じました。こう考えたことは「異なる文化、習慣の中で育ったのだから誤解は生じて当然、失敗を通してからしか理解は深まらないのだ」という、自分を積極的に変えていくちいさなチャンスであったと思うのです。

*日本と他のアジア諸国との間の意識の差は意外にもちいさなものであるということが自分として驚きだった。アジアの中でも中国および韓国というのは共通の思想や文化をわかちあっていたこともあるのである程度は似ているとは思っていたけれど、他のアジア諸国はもっと違う思想をもっていると思っていた。

*日本人観、日本人論を語るときには非常に気をつけなければならないと感じた。例えば、日本人は排他的とか自己主張をしないとかわれているが、これはどういう根拠でだれによっていわれているのであろうか。排他的でなく、革新的な日本人もいるだろうし、自己主張のはっきりしている日本人だってたくさんいる。それなのに日本人観として、そのような像ができあがったルーツはどこにあるのだろうか。

*初めて留学生と話をし、交流会館に出入りするようになったころは、留学生と話をするにもどこか緊張した。新しい友達をつくるのは、もちろん大きな喜びだった。しかし、その喜びは何かあたらしい体験ができるのでないか、という種類の喜びだった。留学生には日本人の友人にはない何かがある。そんな思いは自分も大したことをしている気負いにもつながった。何人かの留学生と大変親しくなると、その友人が留学生であるということや、どの国からきている人といったことは何の特別なことではなくなってくる。考えてみれば、当然のことで自分の友人が名古屋出身とか京都出身とかは、たいていの場合、気にしないものである。しかし、こと留学生の友人とたんに「～さん」という関係になることは、新しい体験で

あるだけに、感動も大きかった。こういう心の変化は、私個人にとってはかけがえのないほど大切なものだが、異文化交流に理解のある人は、たいてい同じような経験をもっているのではないか。同じものと違うもの、理解できるものとわかりあえないもの、という二極が自分の中に生じてその両極を行き来する中で留学生ともいっしょに学生生活をおくっている。

*今までなんども留学生と話す機会にめぐまれたけれど、その内容はとりとめのない世間ばなしだったり、冗談だったり、それぞれの国の事情につこんだ話というのはなかなかできなかつたような気がします。たとえ、その種の話をしたとしても、1対1の個人的な会話がほとんどで討論し合うというところまではいきません。また、個人的には質問できないことがあります。ですから、日本事情ゼミで、ひとつのテーマについてさまざまな事情をだしあい、比較し、討論できる機会をもてたことは、私にとって大きな喜びでした。

*わたしは、日本にきたばかりのころ、全然見知らぬ世界にいる人間がこわかった。言葉のせいもあり、あまり日本人の友達がいなかった。はずかしくて、皆がわたしのことをどう思っているだろうって非常に気になります。大学にはいって、日本人ともだちができるチャンスができてうれしい。これから楽しんで授業を受け、友達を作りましょう。

*発表の方はあまり成功しませんでした。発表の準備過程をふりかえてみると、本当にいい経験だったと思います。グループのメンバーと一緒にテーマを決めたり、資料をあつめたり、討論をしたりして短い時間で皆仲良くなりました。意義深い集まりなのではないかと思えます。

(編集後記より)

*十人十色(じゅうにんといろ)ということばがあります。このゼミは50人50色といえるでしょう。討論やレポートをとおして、自分とは違った「色」にふれていく喜びや大切さを感じてもらえればうれしく思います。

* (略) 料理にたとえれば、この授業は「何かをつくって、あたえてもらうこと」を待っている人のためにあるのではなく、自分で材料を見つけ、料理しようとする人のためにあります。皆さんでおいしい料理をつくっていきましょう。

「書く」という行為は、「話す」行為と違い、内省的な面をもっている。討論の後にこのように「書く」という作業をもってきたのは、「書く」ことをつうじて自分自身の変化に気づくというねらいもある。書くことは、自己とむきあうことでもある。そして、その結果、『論集』というかたちで、他人と考えを共有することは、さらにお互いの理解を深めるという意味で重要な意味をもつであろう。

日本の国際化にともない、今後さまざまな形で日本や他の国との関わりをもつ人が増えていくであろう。そしてそれに伴い日本事情に期待されるイメージや役割も多様化し、また変化していくことが予想される。

本稿では、アンケート及び実践報告をもとに、学生の眼をとおしてみえてくる日本事情のイメージと役割について述べた。(なお、本稿での実践報告における授業形態は、試行錯誤しながら、学生たちとつくりあげてきたものといえる。その意味で学生たちとの共同作品である、と言えよう。)

「日本事情で何を教えるのか」という議論はよくなされている。しかし、その第一歩として

「学生は日本事情に何をもとめているのか」について知ることは重要であるとする。

注

- 1) 長谷川恒雄他 「外国人留学生のための『日本事情』教育のありかたについての基礎的・研究」1992年度文部省科学技術研究成果中間報告書（総合研究A）
- 2) 討論にみられるブレイクダウンに関しては、拙著「誤解はどこから生まれるか ―留学生と日本人学生のコミュニケーション・ブレイクダウンへの対処をめぐって―」『信州大学教育学部紀要86号』（1995）で報告している。
- 3) 『論集』の一部は『やまなみ』外国人留学生雑誌第11号信州大学教養部発行（1995年）に掲載している。

参考文献

- 井下 理 1992「異文化合同授業の展開 ―日米学生による異文化グループワークの試み―」『現代のエスプリ』288号 至文堂
- 門倉正美 1995「日本人学生との混成クラスの試み―教養教育「異文化間コミュニケーション論」の実践報告」日本事情を考える会第2回研究発表会
- 砂川裕一 1995「『日本事情』教育の複合的機能性」『平成七年度日本語教育学会秋季大会予稿集』
同 1996「第三領域としての『日本事情』」『第八回日本語教育連絡会議報告論文集』
同 1996「日本事情教育における『対話的協働』の可能性」『第14回小出記念日本語教育研究会報告論文集』
- 土屋千尋 1995「留学生・日本人学生の共同作業による異文化理解授業のこころみ ―人生相談記事を活用して―」『平成七年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 徳井厚子 1995「誤解はどこから生まれるか ―留学生と日本人学生のコミュニケーション・ブレイクダウンへの対処をめぐって―」『信州大学教育学部紀要』第86号
同 1996予定「異文化理解と日本事情教育 ―異文化接触における自己変容の気づきをとおして学ぶ―」『信州大学教育学部紀要』第87号
- 長谷川恒雄、佐々木倫子、砂川裕一、細川英雄1994『外国人留学生のための「日本事情」のありかたについての基礎的調査・研究』（総合研究A文部省科学研究補助金研究成果報告書）
- 細川英雄 1994『実践「日本事情」入門』大修館
同 1995「ことば、文化、社会を学ぶ ―学習者主体の『日本事情』教育のありかたについて―」『講座日本語教育』早稲田大学日本語教育研究センター
同 1995「教育方法論としての『日本事情』 ―その位置づけと可能性―」『日本語教育』日本語教育学会
- 水谷 修、佐々木瑞枝、細川英雄、池田裕編 1995『日本事情ハンドブック』大修館
- 宮本律子 1995「『日本事情』をどう教えるか―秋田大学における実践報告（1）―」『秋田大学教育学部教育工学研究報告』第17号

信州大学教育学部

講師 徳井厚子